

Personal Spaceにおける左右差

—利き手が要因としてpersonal spaceに影響を及ぼすかどうかの検討—

愛知学院大学 心理科学研究会

長谷川明弘 曾根原貴子 田代百合子 宮本園子

【問題】

personal spaceについて ※₁

personal spaceは『個人空間』や『私有空間』と訳されている。中心になった研究はアメリカを中心に進められてきた。日本では1970年代半ばから盛んになった。

personal spaceの起源は、動物の同種の個体間に存在する特定の距離を保持する傾向が人間にも認められることに気づいたことに始まる。そのような傾向を含めた人間の空間行動の説明のために用いられる概念である。

personal spaceはproxemics (プロクセミクス: 近接学, 近接心学) という個人の空間の知覚や空間の使用の仕方を研究する学問に含まれる。

このproxemicsを1950年代末から70年代末にかけて提唱し、かつ主な研究対象として興味深く取り組んだのはアメリカの文化人類学者Hall, E. T. である。彼は異文化コミュニケーションの経験を通して、個体と環境の問題において文化によって異なることを注目し強調した。人々は社会的相互作用場面において物理的環境 (たとえば、対人距離に示される空間) をコミュニケーションの手段として利用している点を特に指摘した。そのHallの主張を別の表現で表すと、環境は行動の表現手段となりうると同時に、人々が環境を利用する仕方もまた社会的相互作用を理解するうえでの手掛かりになるということである。

しかし、personal spaceは個々の研究者によって様々な説明がなされているが、いまだに明確な概念化は行われていない。以下にこれまでの様々な研究者による主要な定義を示す。

Sommer, R. (1959)は、精神病院内での経験から、患者たちに非常に接近して着席すると、患者はすぐに席を立てて去ってしまう現象に興味を示し、Katz, D. の使用した“personal space”という用語をこの現象の説明する概念として取り上げた。Sommer, R. は1969年の著書の中で、personal spaceを「各個人の周囲にある、感情的に意味を持ったゾーンであり、個人間のspacingの調整に役立つもの」とし、操作的に「個体が他者との間に置く距離」と定義した。また、

〔※₁引用文献が本論文末尾に記載されていることを示す。〕

一種の“なわばり”と考えられるが、地理的照合物を持たず、個人と共に移動するという性質を持つことから、“portable territory”とも呼べるものであるとも述べている。

Horowitz, M. J. (1964)は、「人間が自分と物体あるいは自分と他者の間に置く、ある再生可能な距離がある」ことを予測し、「個人は、自分と他者あるいは自分と無生物との間に固有の距離を保つ傾向を持ち、この距離は、人間に対してよりも、脅威的でない無生物に対しての方が短い」ことを実験の結果、確認した。そして、personal spaceに脅威的なものから物理的に距離を置くことによって自己を防衛するという“body-buffer zone”としての機能があることを指摘し、この傾向を「個人の周囲にある空間領域についての内在化された概念に規定された、規則的に対人距離を取る傾向」とした(1968)。

Little, K. B. (1965)は、「personal spaceとは、個人を直接取り巻いている領域であり、その個人の対人交渉のほとんどがそこでおこなわれる」としている。彼の見出だした相手との心理的距離が小さければ対人交渉場面で相手との間に取られる物理的距離も小さくなるとする点については、心理学分野での対人距離研究の一つのきっかけとなった。

Hall, E. T. (1970)は、「人間は多種多様な情報を与える一連の伸縮する場によって囲まれており、自己というものの境界は、身体の外にまで広がっている。」とし、これをbubble-泡-にたとえた。(Hall自身はpersonal spaceという用語を使用していない。)

以上のように、personal spaceの概念は研究者によって若干異なるが、共通していわれるのは人間が他者との間にある一定の距離を保つという現象である。それは、spacingという生存に必要な空間を確保する生物学的な機能を持つと同時に、その機能の果たす様式が、社会的・文化的に規定されるものであるために、空間利用がコミュニケーションの一形態として位置付けられることになるのであろう。

personal spaceの研究手法

Hayduk(1978)の分類によれば、personal spaceの研究は測定技法の面から5つに分けられる。それは ①自然観察法 ②停止距離法 ③影絵投影法 ④質問紙法 ⑤椅子配置法である。※。

次にそれらの主な研究方法を並べてみると、①自然観察法はSommerを代表とした研究方法で病院内のカフェテリア・図書館・討議場面などでの相互作用場면을観察する方法である。